

月刊

インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 114 年)



今年開通した、デリー南郊 グルガオン (現: グルグラム) のラピッド・メトロ線
オフィスと住宅街を結ぶ環状線 (写真 Rapid Metro HP より)

目次

- 1. インドの山は面白いーナンダ・コート登頂 80 周年記念登山隊 登山報告ー…………… P. 4
- 2. 新旧 「日印食文化」 へのチャレンジ! …………… P. 6
- 3. インドニュース (2017 年 11 月) …………… P. 10
- 4. イベント紹介…………… P. 16
- 5. 新刊書紹介…………… P. 18
- 6. 掲示板…………… P. 19

協会からの重要なお知らせ

謹告

長年の課題でありました、日印協会の機関誌『月刊インド』の用紙が今月から変わりました。

日頃から、内容の質の向上はいうまでもなく、「より読みやすい雑誌」を目指し努力をしてまいりました。しかし、皆様からいただく大切な会費を有効に使わせて頂く目的から、質実剛健の精神で、印刷を外注することなく事務局内の印刷機を使用しているため、用紙の質と印刷の出来栄には制約を強いられてきました。

協会機関誌の印刷の歴史をたどりますと、10年前の2007年9月号で初めて、カラー写真が表紙を飾りました。翌月の10月号からは、“総天然色”ともいうべきカラー写真を各ページにふんだんに使ったものに切り替わり、現在に至ります。

今回、特に複写機業者様2社にコンペをお願いし、昨今のコピー機の技術向上の反映と多少の無理を叶えていただき、現状でベストの紙質と写真の鮮明度が、コストアップすることなく実現しました。今後も引き続き編集一同、読者の皆様により良いものをご提供できるよう努めてまいります。

『月刊インド』編集者 西本 達生

ホームページが リニューアルされました

弊協会のホームページがリニューアルされました！

今までとデザインが大きく異なり、より見易く、操作しやすくなりました。今まで対応が遅れていた、スマートフォンやタブレットなど、異なるデバイスでも快適にご覧いただけるようになりました。

リニューアルされたホームページをご覧頂くには、以下の新しいアドレスへのアクセスをお願い致します。
協会ホームページ、新アドレス（*旧アドレスからもアクセス可能です。）

<https://www.japan-india.com/>

*http→https (httpの後にSが加わります)

ホームページのリニューアルに当たり、当協会の機関誌『月刊インド』が発刊月から1年間、会員様限定のサービスに変更になります。

例：2017年1月号は2018年1月までの間会員様のみが全文を見られます。2018年2月になると、公益性の観点から、この号は一般に全文を公開致します。

なお、会員様限定サービスをご利用頂くにあたり、会員の皆様に事前にメールでお知らせ致しました、ログインIDとパスワードが必要になります。

現代インド・フォーラムは、これまで通り発刊時に会員様に一斉に配信され、ホームページには二週間後、一般に全文が公開されます。

ホームページのリニューアルに当たり、ご不便をおかけいたしますが、引続きのインド情報収集にご活用いただくよう、宜しくお願い致します。



<協会のリニューアルされたホームページ画面>



1. インドの山は面白い —ナンダ・コート登頂 80 周年記念登山隊 登山報告—

An Adventure on Nanda Kot, the Great Peak of the Himalaya

ナンダ・コート登頂 80 周年記念登山隊 隊長 大蔵喜福

この秋九月中旬から十月中旬まで、インドはウッタラカンド（ガルワール）ヒマール、ナンダ・コート（6861 m）峰へ登りに行った。私も隊員もほとんどがインド・ヒマラヤは初見参である。山はインド中央北部地域ウッタランチャル州（ネパールとの国境西側）の北辺にある。同じ山域にインド国内最高峰、双耳峰のナンダ・デヴィが聳える。

ナンダ・コートは、八一年前 1936 年(昭 11)の秋、立教大学山岳部 OB 堀田彌一を隊長に、院生の山縣一雄、現役の湯浅巖、濱野正雄と大毎・東日新聞特派員竹節作太の五名とアン・ツェリン・シェルパが、日本初のヒマラヤ登山に成功した「聖なる山」である。当時は、二・二六事件が起こり、日中戦争から第二次大戦へと突き進むきな臭い時流、そんな時代の海外登山である。相当な圧力にも臆せず、自立した自らの考えを気高き精神で貫き、純粹にヒマラヤに立ち向かった。

数年にわたる情報収集、調査研究、オリジナルの装備考案制作、経費準備等、計り知れない苦悩と努力を乗り越えたことにも敬服。その人間力と行動力の凄さ、インド人とのすばらしい人間関係、登山の本質を貫いた隊員たちに心酔した。その偉業、生き方のすべてに光を当て、世の若者たちに知らしめたいという思いが、この登山隊結成の動機であり、再登頂へ駆り立てた端緒であった。そのうえ、インド・日本交流年という巡りあわせで、幸運にも外務省より指定事業として認定され、インドでの覚えもめでたく大いに助かった。

同じ人数、同じ時期、同じルートで、追体験をしたいと思った。残念ながら、インド国内事情で当時と同じルートを登ることはできないが、タイムトンネルを溯ってその時代を生きた先人を肌で感じたかった。そして頂上に証として埋めた三つの旗と友情のタルチョを何としても探し出したいと思った。掘り出す事で“物言わぬ物証が、物言う物証に変わる”。その行為が、登山史に蘇る多くの教えを今に繋げることができる。

十月七日、正午「ナンダ・コート南壁、残念ながら退却・・・」頂上直下、距離にして二〇〇m。最大傾斜六〇度、積雪が少なく 50 センチのスノーバー（雪杭）を横に埋めて、確保するのが精いっぱい。最後の安全確保ができない軟雪壁。アイス・スクリュ（氷用ピトン）も硬軟織り交ぜた氷壁に頼れず、危険を顧みずの行動を慎む判断を下した。五分五分で登れないこともない。ただ一度でも踏み外したら何人も引っぱり込む。『残り二〇〇m』が私たち登山の結果である。あと二〇〇なのかまだ二〇〇なのか？再登が頭を過ぎる・・・。

“登頂 80 周年記念登山隊”として頂上に埋められた三つの旗を持ち帰ることは、先送りとなってしまったが、“登れた感”と“やり切った感”が心のなかで膨らむ。何故か悔しさはわいてこなかった。初登ルートとは比ぶべくもない困難なアプローチに登頂へのルート。



<写真：ナンダ・コート山頂に立った立教大学山岳部・遠征隊=1936 年 10 月 5 日撮影>



<写真：カウサニより撮影 700m に及ぶ滑り台、頂上雪壁最大傾斜 60 度：ナンダ・コート南壁と最高到達点 6750m（赤×印）>

地形、氷河、高度差、距離、何もかも異なる“面白い山”だったというのが本音である。

特に南面が注目され出したのは、近年になってからで、偵察などで入った登山家もいると聞かすが、隊としては'95秋のイギリス、'02春のインド隊に続きわれわれが三隊目だ。初登はイギリス隊で、不安定な大雪壁に一度は押し戻されるが、四日間降り続いた雪で頂上を脚下にした。それ以来登頂はない。ナンダ・コートの南面はアプローチから、なんとも冒険的要素がひしめき“高きが故に貴からず”の見本のような山であった。

インド・ヒマラヤへの日本からの登山は、過去には多くの登山隊が広範囲に入山し、盛況であったが近年衰退気味、組織だった大きめの隊はほとんどなくなり、より辺鄙にある未踏峰への少人数登山が増えてきた。13の山域に七千m峰が数十座、多くが五～六千m峰で五千m以上が約四千座あるといわれる。政治問題で入域不可や未開放地域もあるが、その分未踏峰もまだまだ残り、六千m峰のバリエーションには事欠かない。標高は低くてもそんな魅惑的の山が広範囲にひしめく。六千の高度なら順応にも支障が少なく、順化に手間いらずで比較的楽であろう。登ることに専念でき、楽しみは広がる。もっと多くの若者が活動してほしいエリアである。

下山後の10月13日、IMF（インド登山財団）に登山報告に行ったら、担当官が「そういえば、日本人が三人来て、うちの施設に泊まってる。呼んでこようか」と突然言い出した。しばらく待っていると信大山岳部出の馬目さんのグループ3人で来たらしく、目的の山は登れず仕舞いだったが、周辺の山を代わりに登ってきたと言っていた。彼らの話では依頼すればIMF内の施設に安価に食事付きで泊まることもできるという。IMFの登山許可費用等も他国に比バリーズナブルだし、都市滞在の便宜もはかってもらえるなら、若者にはうってつけと思うがどうだろうか？

だが、難点がふたつ、インドでは国の事情で登山に必要な五万の地形図が入手できないのである。測量局による5万図は刊行されているが、インド登山財団にすら一枚もなく、一般には全く入手不可能である。本屋などで入手できるのは50万図以上のもので登山には全く役立たない。ということはインド・ヒマラヤでの登山は、地図作りをしながらの大冒険？となるわけである。また、衛星電話は全く許可されない。こういった問題はそれぞれの国の事情だからしかたのないことだが、逆手にとってこのスタイルを楽しむような登山をすればそれはそれで面白い。外部連絡が旧態依然のメールランナーだけとなれば隔離された別天地、気分よく活動ができるというものだ。



<写真：ビンダリ川とカフィニ川の合流するダワリ集落での橋造り
：流された橋を架ける>

山は山で世界からの情報を集めれば、今やインドの隅々まで知ることはできるだろうが、ことアプローチについては、現地まで行ってみないとわからないことが多い。今回も、奥地では何年前の豪雨の修復がまだまだで、橋がないまま河原の冬道にキャラバンを進める無茶ぶりとなった。モンスーン時に、行くしかないところ増水する谷筋に安全な道はない。

仕方なし無理やりの高巻きが数時間続く。高度差も百メートル余りの上り下りを一日に何回もである。大変なのはポーター、30キロ以上の荷物を肩に草付きの泥壁、それも傾斜の強い恐ろしい崖である。

履いているのはサンダル？途中であきらめる者も出た。安全地帯で待っている方がまだ安心、事が起きてからでは遅すぎる。だが何事も起きず皆無事というスキルには相当驚かされた「なんていう凄い奴ら！！」ただ、荷物が遅れに遅れ、登山活動に支障が出た。予備日の想定を増やすことが必要である。「想定外を造らず」は計画の最低条件だが、すべてクリアできればこんなに楽しい登山はあるまいと思った。

大蔵喜福（おおくら よしとみ）'51生、66歳 登山家（株）毎日映画社特別顧問

2. 新旧「日印食文化」へのチャレンジ！ Challenges to Japan-India Food Culture



【今号の食品特集第一弾にあたり】

日系企業のインド進出は、2005年ごろから2013年ごろまでの異常な加熱の勢いから、やや踊り場的な局面を迎えております。しかし着実にその数が増加しており、業種も多様化しています。それに伴い在留邦人数も増加し、2006年の2千人から今や1万人の大台に届こうとしています。現地駐在員のご家族帯同も増え、日常生活のサポート体制もようやく整い始めたといえます。そのような背景から、今後は月刊インドで機会あるごとにインドにおける暮らし方や、インド政府の関心の高い日本の食品加工の話題を取り上げていきたいと思っております。

今回はトピックとして、90年前に日本で本格インドカレーを広め、『インドに里帰りキャンペーン』を成功させた当協会法人会員の新宿中村屋様のお話と、デリー首都圏で日本のスイーツやパンの先駆け的存在で、インド全土へのコールドチェーン展開を始めたIrohaを運営されている当協会個人会員の社長に執筆をいただきました。

編集者個人的には、インド滞在中に現地のIrohaでようやく日本と同じ食パンにありつき、また日本に帰国の今は、インドにこだわりつつ日本に定着した新宿中村屋のレトルトカレーでサバイブ出来ていると言っても過言ではありません。

中村屋「カレーをありがとうキャンペーン」

株式会社 中村屋 法人会員

<純印度式カレーの誕生>

イギリスから伝わった小麦粉を使用したカレーが日本で広まっているなか、中村屋ではスパイスをふんだんに使用した本場インドのカレーを、90年前に日本で初めて発売しました。

それは創業者の相馬愛蔵・黒光（こっこう）夫妻がインド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースを匿ったことにはじまります。後に夫妻の長女 俊子と結婚したボースは相馬家との交流を深め、「日本に祖国インドのカレーを紹介したい」という思いから、中村屋で喫茶部（レストラン）を開設する折に、純印度式カレーをメニューにすることを提案しました。そして、1927年6月12日に発売した純印度式カレーは、中村屋の名物料理となり今日まで受け継がれ、今年で90周年を迎えます。

<キャンペーンのあらまし>

本年が日印友好交流年であり、純印度式カレー発売90周年の記念の年でもあることから、日印の食や文化交流の拡大に貢献する目的で、日本の国民食となったカレーを教えてくれたインドへ感謝を伝えるキャンペーンを実施しました。本イベントは、日印友好交流年記念事業に認定され、6月1日～9月30日の4ヶ月間実施しました。

<活動報告>

インドでの活動

インドでは6月1日～30日の間、グルガオンのMGFメトロポリタンモールへ感謝の意を表した大型看板を設置しました。現地では「こんなに感謝してくれてありがとう」「日本人の律儀さに敬意を払います」といったコメントをいただきました。



<写真：キャンペーンで、グルガオン（現：グルグラム）のMGFメトロポリタンモールへ設置した大型看板>

日本での活動

今回のキャンペーンではSNSによる情報発信を行い、キャンペーン特設ホームページ (<http://curry-arigato.jp/>) と公式ツイッターアカウントを開設。ツイートは約900万件観覧されました。キャンペーンのニュースリリースも実施し、テレビ放映やWEBでの記事配信なども含め、計164件となりました。

期間中のインスタグラムの投稿は約2,000件、ツイッター投稿は約500件あり、当社のみならず、日本人シェフによるインドカレー、インド料理店15店舗のシェフにご賛同いただき、キャンペーンを盛り上げることができました。

ご賛同いただいた店舗へは「カレーをありがとう」のポスターを設置し、感謝の意を「#カレーダンニャバード」をキーワードに、日本のカレーの写真をSNSに投稿していただけるよう呼びかけるキャンペーンステッカーを配布していただきました。また、キャンペーンにご賛同いただいた店主の皆様からはメッセージをいただき、ツイッターで公開しました。

9月23、24日に代々木公園で開催された「ナマステインディア2017」にも出店し、インドカレー、カレーパン、90周年記念のレトルトカレーを販売し、ご来場いただいたお客様と交流することができました。また、歌舞伎座10月公演の新作歌舞伎「マハーバーラタ戦記」公演期間中には弊社90周年記念のレトルトカレー「プレミアムインドカレー」を歌舞伎座館内にて販売していただきました。



<写真: 左・キャンペーン公式HP (中) キャンペーンにご賛同いただいた皆様 シタール増田社長 (左)、デリー田中社長 (右) >



<写真: ナマステインディア店舗の様子>

インド大使館からは「カレーをありがとうキャンペーン」に対して、お祝いのお手紙を頂戴いたしました。

6月12日の「恋と革命のインドカレーの日」に中村屋新宿店にて開催した、催事の売上の一部を日印文化交流のために、公益財団法人日印協会へ寄付させていただきました。9月6日に弊社「グランナ」で行われた日印協会の会員交流会で目録をお渡ししました。



<写真: 左 日印協会 平林理事長 (右)、弊社代表取締役社長 鈴木達也 (左)、右 インド大使館からのお手紙>

インドに起業して6周年、インドのオアシス「Iroha」

Nagomi Consulting Pvt.Ltd. Managing Director (店主) 柳 邦明 個人会員

私が初めてインドを訪れたのは、2008年のことでした。ある団体の世界会議がデリーで開催されることになりインドを訪れました。その時は、日本やヨーロッパにはないカオスのような状況に圧倒され、カルチャーショックを受けましたが、喧騒の中にも静けさが聴こえるような雰囲気新鮮に感じられたのを覚えています。

その後2010年に再び訪れ、翌年10月19日にTokyo style sweetsとして「Iroha」という洋菓子店をオープンしました。それから6年経ち、今ではパンも製造販売するお店として知られるようになっています。

今年の創業記念日は、ディワリというヒンドゥー教の新年を祝うお祭りとも偶然にも重なりました。お店は休業しましたが、故郷に帰っている者を除いてスタッフ全員が集まり、お祈り(Puja)をします。その後ディワリギフト(お祭りにちなんだプレゼント)とボーナスを渡しました。スタッフみんなの嬉しそうな顔を見ながら6周年を迎えることができ、本当に良かったと感謝しつつ、これからも、お客様やスタッフたちと一緒に「Irohaがあつてよかった」と思えるような経営をしようと決意を新たにしています。

インドでは、法律上でカースト制度が廃止されていますが、実際の庶民の生活には色濃く残っています。その中で、カースト制に縛られることなく自由に生きている人々のパワーに興味を持ちました。最初にこの地を訪れた時は、面白い国だとは思いましたが、その時ははまさか自分がビジネスをするとは思っていませんでした。

なぜインドで起業しようと思ったのかとよく聞かれます。労働人口が多いとか高度成長期に入ったとか色々と言うこともできますが、私にとってインドは居心地がいいのです。車のクラクションや路上に落ちたゴミ、スパイスの匂い、土埃が舞っている状況は日本人には馴染みのない環境です。しかし、いざ帰国すると、静かできれいで予定調和に物事が進み、ハプニングがほとんど起きない日本に物足りなさを感じることがあります。そしてなぜかいつも、あのインドに「帰りたい」と思うのです。インドは洗練された国とは言えませんが、荒削りの生命力があり、1960年代の日本に近いものがあるのではないかと感じています。だとすると、この高度成長に乗ってインドの発展に貢献できるかもしれないと考えたことが、インドでビジネスを始めるきっかけになっています。

とはいえ、ここに至るにはたくさんの挫折もありました。一番大きかったのは、一緒に来たパティシエが一年もしないうちに辞めたことです。今でこそ自分の未熟さが引き起こしたことであつたと分かりますが、当時の自分は「あなたがやるって言ったから店を作ったのに、一年もしないで辞めるなんて冗談じゃない」と思っていました。しかし、「もう店を畳もうか…」と思っていた矢先、どこから聞いたのか一人のお客様が私に会いに来ました。そのお客様が、「Irohaは私たちのオアシスだから、やめないで欲しい」と強い口調でおっしゃったのです。その時まで自分が作ったお店をどうするかは自分次第だと考えていた私は頭をガーンと殴られた気分になりました。Irohaは自分だけのお店ではなく、既にお客様のお店になっているのだと。とすれば、勝手にはやめられない。そういう状況の中で、今も健闘してくれている大森シェフに出会いました。大森シェフは元々パン職人で、その後お菓子の製造にも携わってきた人でした。今ではIrohaは、洋菓子とパンのお店としてお客様に親しまれるようになりました。あの時、お客様に「やめないで欲しい」と言って頂かなかつたら、今頃Irohaはなかったかもしれません。最大のピン



<写真：ディワリでのPuja。右端 筆者、Irohaのスタッフと>



<写真：Irohaのシュークリームを頬張るインドの子どもたち>

チは最高の機会となりました。

昨年から Iroha は、ムンバイにパンの空輸ビジネスを始めました。これからもっと供給体制を整えば、チェンナイ、バンガロールと空輸先を増やしていきたいと考えています。せっかくインドでやっているのだから、インド人のお客様にも食べてもらいたい。そのためには、インド人に合った商品の開発が不可欠です。ここで思い出されるのは、日本のカレーライスのことです。インドカレーは、元来細長くぼそぼそしているインディカ米に合うスープのような液体です。日本のお米はふっくらもちもちしているため、やはりそのままでは合いません。ところが、イギリスがインドから持ち込み、明治時代に日本に伝わった英国式「カレー・アンド・ライス」は、とろみがあり日本のお米と相性が良かった。そこで誰かが、日本人の好みに合うように改良に改良を重ね、日本独自のカレールーを考案したのだと思われます。こうして日本人の舌に合うカレーができたことで、カレーライスは今や誰もが愛する国民食となりました。

同じようにインドでも、インド人スタッフ自身で自分たちが美味しいと思うパンを考案し、日本の技術を使ったインド独自のパンが広まって欲しいと思っています。そのためには教育が大切です。日本の洋菓子やパンをインドの製菓学校でも学ぶことができれば、その知識や技術を使って彼らが食べたいものをつくることできる。そして、それは Iroha が継続していくための次のステップになります。次の未来を作るのは、インド人スタッフ達です。歯車のように言われたことだけをやるスタッフよりも、一人ひとりがリーダーとして行動できるスタッフを育成したい。これはキッチンスタッフだけでなく、販売や経理など Iroha に関わる全てのスタッフに言えます。

最後に、これまででもこれからも、Iroha は和み癒される空間と、お客様に喜ばれ愛される商品を提供してまいります。インドのグルガオンにお立ち寄り際には、ぜひ足をお運びください。

皆さまのお越しをお待ちしています。



<写真：左 お店の外観、右 品揃え豊富な店内>

3. インドニュース(2017年11月)

News from India

1. 内政

【連邦政府・連邦議会】

11月17日

- 17日、米格付け会社ムーディーズがインドの格付けをBaa2に格上げしたことに関し、ジャイトリー財務相は、最近2、3年間で実施された構造改革が特に評価されたとして、13年ぶりの格上げを歓迎すると述べた。これを受け、 कांग्रेस党は、モディ政権は経済を破壊したことで失った信用を取り戻すために、格付けのような藁にもすがっているのだと批判した。

11月24日

- 冬期国会の会期（12月15日－1月5日）が発表された。

11月30日

- 第2四半期のGDP成長率が6.3%と発表された。第1四半期の5.7%から回復したことを受け、ジャイトリー財務相は、旧高額紙幣廃止及びGST導入の影響が収束しているとも見られ、第3四半期以降の成長率は更に上昇軌道に乗るのではないかと述べた。

【 कांग्रेस党】

11月17日

- कांग्रेस党は、12月16日投票、19日開票とする党総裁選挙日程を発表した。ラフル・ガンディー副総裁が唯一の候補者となる可能性が高く、この場合、立候補取り下げ期限である11日までに無投票で総裁が決定することとなる。

【ビハール州】

11月27日

- ジャナタ・ダル統一派(JDU)のシャラド・ヤーダヴ派は、 कांग्रेस党と選挙協力を行っているグジャラート州議会選挙の完了後に、新党を立ち上げると述べた。

2. 経済

【国営銀行合併・再編に向けた省庁間会合の新設】

11月1日

- インド財務省は国営銀行合併・再編に向けた省庁間会合(Alternative Mechanism)の新設に係る政府承認についてプレスリリースを公表した。新機構はジャイトリー財務兼企業大臣を議長とし、ゴヤル鉄道兼石炭大臣、シタラマン国防大臣を構成員とする。合併スキーム策定の原則承認を受けるための銀行からの提案は新機構に付され、承認を受けた提案について3か月毎に内閣に報告される。新機構は合併に係る提案について審査を行うため、銀行に指示を与えることができ、また、新機構は原則承認の前にインド準備銀行(RBI)から情報提供を受けることがある。新機構は合併提案の審査のため独自の手続きを行うことができ、全体として銀行国有化法(Nationalization Act)の目的に沿って運営される。策定された合併に係る最終案は中央政府により承認され、国会に付される。新機構の事務局は金融サービス局が務める。

【タミルナド州シングル・ウィンドウ・ポータルサイトの設立】

11月2日

- タミルナド (TN) 州において、投資環境改善のためのシングル・ウィンドウ・ポータルサイトが立ち上がった。同サイトは、オンライン上で TN 州政府内 11 省庁部局にかかる投資に関する 37 のサービスを一元化したシステムで、オンライン上で操業許可、環境アセスメント等にかかる許認可申請や更新、手数料の支払いが可能となる。投資手続きが迅速化され、許認可取得までの所要時間や作業量の削減と効率化を図る。今後、TN 州はシングル・ウィンドウ・モニタリング委員会や投資促進モニタリング委員会の設立も計画しており、更なる投資環境改善策による投資促進が期待されている。

【ワールド・フード・インディア】

11月3-5日

- ニューデリーにてワールド・フード・インディア 2017 が開催され、日本はパートナーカントリーとして参加し、谷合農林水産副大臣が出席したほか、約 60 の日本企業が出展した。モディ首相及びバダル食品加工大臣は、日本企業が出展するジャパン・パビリオンを視察し、谷合農林水産副大臣と面会した。また、谷合農林水産副大臣及び平松大使出席の下、ジャパン・セッションが開かれ、日本企業によるプレゼンテーションが行われた。閉会式では、次回ワールド・フード・インディアは 2019 年に開催されることが発表された。

【物品・サービス税 (GST)】

11月10日

- GST 委員会の第 23 回会合が開催され、213 品目の物品の GST 税率引下げ、申告手続の緩和及び簡易課税制度の改正、サービスに係る GST 税率の変更等の決定がされた。また、2017 年 7 月期、8 月期及び 9 月期について期限内に申告できない納税者が多かったため、これらのケースについて遅延料を免除する等、一部申告手続等が緩和された。

【格付会社ムーディーズによるインド国債の格上げ】

11月16日

- 大手格付会社ムーディーズ (Moody's) は、インド政府の自国通貨建て及び外国通貨建て長期債券発行体格付けを「Baa3」から「Baa2」に引き上げた。

【アンドラプラデシュ州とトヨタキルロスカの電気自動車導入に係る覚書締結】

11月16日

- トヨタ・キルロスカ・モーターとアンドラプラデシュ (AP) 州は、AP 州内への電気自動車 (EV) 導入にかかるフィージビリティ調査の実施に関し、覚書に署名した。同覚書は、AP 州が現在開発中の新州都アマラーヴァティーのスマートシティ構想の一環として、アマラーヴァティーにおける EV 導入の実現の可能性を探るもので、EV 導入に関し民間企業と州政府が作成する覚書としてはインド初となる。

【コルカタ・バングラデシュ間自動車運搬船の就航】

11月23日

- コルカタのネタジ・スバス船渠からバングラデシュのモングラ港に向け、240 台のトラック及びミニバン等の車両を搭載した自動車運搬船 (RORO) 船が出港した。タタ自動車と同船による託送を契約しており、月 4 回程度の輸送を計画している。同社の自動車総輸出台数は年間約 6 万台、その内、バングラデシュへの輸出は 2 万 2 千台とされている。バングラデシュの自動車需要は 1 か月あたり 3 千~3 千 5 百台程度で、その内約 2 千台をペトラポール経由での陸上輸送とし、残りの約 1 千台を同船にて海上輸送する予定。

【グローバル・アントレプナーシップ・サミットの開催】

11月28日

- グローバル・アントレプナーシップ・サミット (GES) 2017 がハイデラバードで開催され、モディ首相が出席したほか、トランプ米大統領の娘であるイヴァンカ・トランプ米大統領顧問も出席した。本年の GES のテーマは「女性を第一に、全ての者に繁栄を (Women First, Prosperity for All)」とされた。



<写真：GES で演説をするモディ首相、PMINDIA より>

【2017 年度第 2 四半期の GDP 成長率】

11月30日

- インド政府統計・計画実施省 (MOSPI) 傘下の中央統計局 (CSO) は、2017 年度第 2 四半期 (7 月～9 月) の GDP 成長率を発表、今四半期の実質 GDP 成長率は 6.3% (前年同期比) となり、前期の 5.7% (注：約 3 年ぶりの低水準) から持ち直す格好となった。今回経済成長率が回復した要因としては、①工業部門、特に製造業において、GST 導入後の企業における在庫圧縮の反動が見られたこと、②民間セクターによる設備投資が加速したこと等が指摘されている。

3. 外交

【印シンガポール関係】

10月31日～11月1日

- シンガポール外相が訪印し、31日、共同閣僚級委員会の枠組みでスワラージ外相と会談し、今後のハイレベル交流、ASEAN50周年及び印ASEAN対話開始25周年行事、政治・防衛・安保分野での協力、貿易・投資、観光・文化協力、連結性、国連・国際機関での協力等について話し合われた。1日、アッサム州グワハティを訪問し、ソノワール州首相と会談した。シンガポールの支援を受けて設立される技能開発センターに関するMOUが署名された。

【印ブータン関係】

10月31日～11月3日

- ブータン国王王妃両陛下が訪印した。大統領、副大統領、首相、外相、その他閣僚と会談した。

【印英関係】

11月8日～11月9日

- 英皇太子殿下が訪印し、モディ首相と会談した。来年 4 月に英国で開催されるコモンウェルス首脳会合、気候変動、持続可能な開発目標、経済協力等が話し合われた。皇太子殿下はインドの他、シンガポール、マレーシア、ブルネイを訪問。

【印フィリピン関係】

11月12日－11月14日

- モディ首相はフィリピンを訪問し、マニラで行われた第15回印ASEAN首脳会議及び第12回東アジア首脳会議等に出席したほか、日米豪印局長協議が行われた。フィリピンを訪問中、モディ首相は、安倍総理、トランプ米大統領、フィリピン大統領、豪首相、ベトナム首相、ブルネイ国王、ニュージーランド首相と会談したほか、マニラでインド人コミュニティに対してスピーチを行った。

【印仏関係】

11月17日－11月19日

- ル・ドリアン仏欧州・外務大臣が訪印し、スワラージ外相と代表団レベル協議を行った後、プレス・ステートメントが発出されたほか、モディ首相を表敬した

【印スリランカ関係】

11月21日－11月24日

- ウィクラマシンハ・スリランカ首相が訪印し、ニューデリーで開催された第5回サイバー空間に関する国際会議2017(GCCS 2017)の開会式に出席したほか、モディ首相と会談及びコヴィンド大統領を表敬した。またスワラージ外相から表敬を受けた。

【印米関係】

11月28日－11月29日

- 28日－29日、イヴァンカ米大統領補佐官が訪印し、世界起業サミットに参加したほか、そのサイドラインでモディ首相を表敬及びスワラージ外相と会談を行った。

【印露関係】

11月29日－12月1日

- スワラージ外相がSCO（上海協力機構）首脳会議出席のためソチを訪問した。

4. 日印関係

【第5回日印テロ対策協議】

11月7日

- 東京において第5回日印テロ対策協議が開催された。日本側からは山本栄二外務省国際テロ対策・組織犯罪対策協力担当大使が、インド側からはラヴィ・タパール外務次官補（H.E. Mr.Ravi Thapar, Additional Secretary (Counter-Terrorism), Ministry of External Affairs）が、それぞれ代表を務めた。また、両国のテロ対策関係省庁からも関係者が参加した。今回の協議では、地域テロ情勢や両国のテロ対策措置、また、国際的なテロ対策協力について意見交換が行われた。

（メモ）日印テロ対策協議（2005年4月の日印首脳会談において開催が決定）

これまでの開催状況：

- | | |
|----------|--------------|
| 2005年7月 | 第1回協議（於：東京） |
| 2007年12月 | 第2回協議（於：デリー） |
| 2012年11月 | 第3回協議（於：東京） |
| 2015年11月 | 第4回協議（於：デリー） |

【日米豪印のインド太平洋に関する協議】

11月12日

- フィリピンのマニラにおいて、日本、オーストラリア、インド及び米国の外交当局は、インド太平洋地域における法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の確保に向けた取組につき、議論を行った。協議では、インド太平洋地域におけるルールに基づく秩序・国際法の尊重の堅持、圧力を最大化させることが必要な北朝鮮による核・ミサイル問題を含む拡散の脅威への対応、インド太平洋地域における航行の自由及び海洋安全保障の確保、テロ対策等に関する協力の方向性につき、域内各国との協力を含め、議論が行われた。参加者は、議論を継続するとともに、共通の価値と原則に基づく協力を深化させていくことを確認した。

【第11回日印首脳会談】

11月14日

- ASEAN 関連首脳会議出席のためにフィリピン・マニラ訪問中の安倍総理は、モディ・インド首相との間で会談（両首脳間で11回目）を行った。

【インド高速鉄道に関する第6回合同委員会の開催】

11月22日

- インドのニューデリーにおいて、インド高速鉄道に関する第6回合同委員会が開催された。この会合には、和泉洋人内閣総理大臣補佐官（日本側の共同議長）を団長として、関係部局（外務省、財務省、経済産業省、国土交通省、JICA等）の幹部が参加し、インド側からは、ラジブ・クマール行政委員会副委員長（Mr. Rajiv Kumar, Vice-Chairman, NITI (National Institution for Transforming India) Aayog (Committee))（インド側の共同議長）を団長として、鉄道省、外務省、商工省等の関係各省及びインド高速鉄道公社の幹部が参加した。この会合では、インド高速鉄道事業の進捗や今後の工程を確認するとともに、メイク・イン・インド（現地生産）の推進や駅周辺の交通基盤の整備について議論を行った。

【堀井学外務大臣政務官のサイバー空間に関するニューデリー会議出席】

11月23日－24日

- 堀井学外務大臣政務官は、ニューデリーにおいて行われた「サイバー空間に関するニューデリー会議」(Global Conference on Cyber Space (GCCS) 2017) に出席した。堀井学政務官は、この会合の機会を利用して、スワラージ・インド外務大臣 (Mrs. Sushma Swaraj, External Affairs Minister) と会議場で立ち話を行うとともに、アクバル・インド外務担当閣外大臣 (Mr. M.J. Akbar, Minister of State, Ministry of External Affairs) と会談し、本年9月の安倍総理大臣インド訪問をフォローアップする観点から、日・インド関係や地域情勢につき幅広く意見交換を行った。

【JENESYS 2017によるインド人大学生・大学院生・社会人の訪日】

11月28日－12月5日

- JENESYS 2017の一環として、インドの大学生・大学院生・社会人19名が訪日した。一行は、「日本語コミュニケーション・日本文化交流」をテーマに、最先端技術から歴史的建造物まで幅広く視察した。また、地方訪問（奈良県）、日本文化体験や地域住民との交流などを通して日本についての理解を深めた。このプログラムを通じて、インドの将来を担う若者が、我が国の強みや日本的な価値を理解し、一人一人が日本の魅力について、積極的に発信することが期待される。

(メモ) JENESYS 2017

日本とアジア大洋州の各国・地域との間で、対外発信力を有し将来を担う人材を招へい・派遣し、政治、経済、社会、文化、歴史、外交政策等に関する対日理解の促進を図るとともに、親日派・知日派を発掘し、日本の外交姿勢や魅力等について被招へい者・被派遣者自ら積極的に発信してもらうことで対外発信を強化し、我が国の外交基盤を拡充することを目的としている。

今月の注目点： 第11回日印首脳会談

11月14日、約40分間にわたり、ASEAN 関連首脳会議出席のためにフィリピン・マニラ訪問中の安倍総理は、モディ首相との間で会談（両首脳間で11回目）を行った。概要は以下のとおり。

- 安倍総理より、9月のインド訪問時の盛大な歓迎に対する謝意を伝え、モディ首相と共に、日印関係の潜在力を全面的に開花させ、法の支配に基づいて自由で開かれたインド太平洋を実現し、「日印新時代」にふさわしい関係に発展させたい旨述べた。また、安倍総理から、沖縄南方での貨物船沈没により、行方不明となっているインド人乗組員に対するお見舞いを述べた。
- これに対し、モディ首相より、総理のお見舞いに対するお礼を述べるとともに、9月の地元グジャラート州訪問に謝意を表しつつ、総理の訪問はインド国民の心に残る歴史的な訪問となった、引き続き、自由で開かれたインド太平洋の実現に向けて連携していきたい旨述べた。
- 両首脳は、9月の安倍総理インド訪問の成果を踏まえ、高速鉄道、US-2、連結性、人的交流、さらに地域情勢について率直な意見交換を行った。
 - 安倍総理から、モディ首相と共に9月の高速鉄道起工式典に立ち会えたことは大変喜ばしい、高速鉄道の開業に向けて、引き続きよく連携していきたいと述べたのに対し、モディ首相より、本件事業の成功は非常に重要であり、早期の開業に向けてあらゆる努力をしたい旨述べた。
 - 安倍総理から、US-2に係る協力について早期の具体的進展を期待する旨述べ、両国間で議論を続けていくことで一致した。
 - 安倍総理から、質の高いインフラ整備を含む連結性強化のための日印協力を一層具体化したい旨述べ、両首脳は具体化に向け引き続き協力することで一致した。
 - 安倍総理から、人的交流の拡大に向け、インド国民に対する更なるビザ緩和措置を明年1月1日から開始する旨述べたのに対し、モディ首相より日本の取組への謝意が表明された。
 - 安倍総理から、北朝鮮は核・ミサイルの開発を継続しており、9月の日印共同声明を踏まえ、圧力を最大限まで高め、北朝鮮が非核化を前提とした対話のテーブルにつかざるを得ない状況に追い込むべき、中国が更なる役割を果たすことが重要、拉致問題は最重要課題であり、早期解決に向けた理解と協力を期待する旨述べた。モディ首相より、北朝鮮は地域の脅威であり、国連安保理決議の履行が必要である旨述べ、両国は緊密に連携していくことで一致した。



4. イベント紹介

Japan-India Events

=◇ 最近のイベント ◇=

◆ 小さくて大きな出版社「タラブックス」

11月25日(土)。板橋区立美術館で展覧会「世界を変える美しい本 インド・タラブックスの挑戦」が開幕した。タラブックスは南インドのチェンナイにある出版社。インドの民俗芸術を使った美しい絵本が世界中で高い評価を得ており、世界各国で販売されている。だがスタッフの数でいうと、本をつくる工房の職人たちを合わせても50人に満たない小さな組織だ。

タラブックスの本としてよく知られているのは、製紙から製本までほぼ手作業で作られているハンドメイドの絵本で、日本では『夜の木』や『水の生きもの』などのタイトルで翻訳版が出ている。手で梳いた厚みのある紙に、シルクスクリーンという版画の技法を用いて1ページずつ印刷され、職人が糸で綴じ、表紙を糊付けして仕上げる。気が遠くなるほどの工程を経て、1冊の絵本が完成する(1月8日まで開催中の展覧会でその作業を追った映像を上映しているので、ぜひご覧いただきたい)。

20年以上にわたるタラブックスの歴史のなかで出版された本は120冊あまり。それぞれの本の成り立ちを知るにつれ、タラブックスの本づくりがいかに斬新かつ冒険的で、社会運動的な大きな視座をもって行われてきたかということがわかり、驚かされた。

例えば、タラブックスではしばしばインド各地の様々な部族の画家たちが絵本の著者となる。伝統を守りながら日常的な営為として家屋の壁や床に描いたり、安価な民芸品として市場で絵を売ったりしている彼らに、タラブックスは初めて本という表現の場を与えた。本ならば、画家たちは自らの世界観や伝統を語ることができる。民芸品として消費されるときには気にも止められなかった彼らの声を、本は伝えられるのだ。報酬についても、タラブックスは正当な額を支払うことを徹底した。知識のなさゆえに搾取されることの多い民俗画家たちに、著作権という概念を伝え、増刷のたびに支払われる報酬を訝しがる画家には、あなたにはお金を受け取る権利があるのだと、根気よく説明を繰り返したという。こうした逸話は、今回展覧会に伴い開催された講演会やシンポジウムでもたびたび紹介された。そしてその度に、聴衆の方々が深く聞き入っているのが伝わってきた。

タラブックスの本は美しい。だが、美しいだけではない。同時に、美しいからこそ、本は辺縁に暮らす画家たちの絵と彼らの声を乗せてはるか遠くの読者のところまで行けるのだ。

今回、展覧会のタイトルを「世界を変える美しい本」とした。いささか大げさと感じる人もいるだろう。だが、タラブックスの本や、彼らの本づくりに対する姿勢は、驚きと気づきのようなものを確かに人々に残している。ならば、決して大げさではなかったという気がしている。チェンナイでめくられた絵本のページが起こした風は小さいかもしれないが、その風は遠く離れた国で、思い掛けない大きな嵐を起こしつつあるのかもしれない。

どうかみなさま、展覧会へお出かけください。

(本文・写真提供：展覧会企画協力 ブルーシーブ株式会社 大久保 美夏)



<写真：タラブックスのギーター・ウォルフさん(右)とV・ギーターさん 撮影：吉次史成>

「世界を変える美しい本 インド・タラブックスの挑戦」展

板橋区立美術館(東京都板橋区赤塚5-34-27)にて2018年1月8日(月・祝)まで開催中

巡回予定：刈谷市美術館(愛知県) 2018年4月21日(土)～6月3日(日)

< 『世界を変える美しい本 タラブックスの挑戦』展、公式図録のご紹介 >

§ 『世界を変える美しい本—インド・タラブックスの挑戦—』

編集：草刈大介・大久保美夏（ブルーシープ）、松岡希代子・高木佳子（板橋区立美術館）

発行：ブルーシープ株式会社

展覧会公式図録 ISBN978-4-908356-03-2

2017年11月25日より板橋区立美術館で開催されている展覧会の公式図録です。製作者と、それを受け取る私たちをつなぐ、架け橋のような図録。タラブックスの立ち上げのコンセプトから、製作に携わる人々の日常の風景、その日常から編み出される絵と物語の背景を丁寧に理解していくことができます。この図録もまた、「美しい本」です。展覧会へ立ち寄られる際は是非手に取ってみてください！



日印協会事務局は

2017年12月27日（水）より

2018年1月4日（木）までを、

年末年始休業とさせていただきます。

新年の業務は、

2018年1月5日（金）から開始致します。

公益財団法人 日印協会



5. 新刊書紹介 Books Review

§ 『怖れるなかれ (フィア・ノット) —愛と共感の大地—』

著者：ビノーバ・バーベ、サティシュ・クマール

編集：辻信一、上野宗則

発行：ゆっくり小文庫

定価：本体 1,800 円＋税 ISBN978-4-9905667-8-4

インドの思想家で社会運動家でもあるビノーバ・バーベは、ガンディーと共にインドを独立へと導いた非暴力・不服従運動の第一指導者。ガンディーの思想を体現し、生きる糧を貧しい人々へと与え続けた、そんな”愛と共感の革命家”から、現代を生きる私たちの社会と人生を豊かにする学びの贈りもの。政治、学門、真の豊かさを人々（民衆）の手に取りもどすことに人生をかけたビノーバ・バーベの示唆に富む一冊。



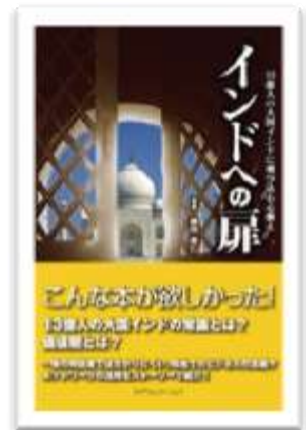
§ 『インドへの扉—13億人の大国インドに飛び込むための心構え—』

著者：藤田 寿仁

発行：カナリアコミュニケーションズ

定価：本体 1,300 円＋税 ISBN978-4-7782-0414-3

13億人の大国インド。中国について大きなビジネス市場になると言われている。親日国として知られているが、日本人にはまだ遠い国だ。著者は企業のインド駐在員としての経験から、インドでのビジネスの流儀やネットワークの活用にはじまり、インド社会で逞しく生きていくためのヒントなどを、インド人との対話を織り込んだ経験話として紹介している。日本とは違う契約社会のインドで、日本とは違う常識の中で、いかに相手を理解するか。いかに目的を達するか。ある時は悩み、驚き、怒り、そしてある時は楽しみながらインドの常識を理解していく著者の姿がかいま見えて、これからインドビジネスに係わる人々には参考になる一書だ。織り込まれた写真もインドの様々な姿を映し出していておもしろい。



§ 『インド思想から仏教へ—仏教の根本思想とその真髄—』

著者：高楠 順次郎

発行：書肆心水

定価：本体 6,900 円＋税 ISBN978-4-906917-72-3

高楠 順次郎 (1866～1945) は、日本近代仏教の創始者である。仏教の母となるインド思想を丁寧に紐解き、そこから継承、否定を通し新たに生み出された仏教とは何であるのか。無神論を説く仏教の独自性を示し、その根本思想を説く。

目次

[仏教の根本思想] 第一講 仏教以前のインド思想、第二講 仏教の継承せる古教説、第三講 仏教の完成せる諸教説、第四講 仏教の基本教義—四訪印、第五講 仏教の特質 [仏教の真髄— インドの古俗、二 仏教とインド、三 無我、四 無神、五 知性の宗教、六 人間性の自覚、七 理想主義



6. 掲示板 Notice

(次回の『月刊インド』の発送日)

次回発送は、**2018年1月19日(金)**を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記>

冒頭でもお伝えした通り、今月から協会のホームページがリニューアルされました！スマートフォン無しでは日常生活が困難な現代において、初代iPhoneが発売された2007年に開発された、旧態依然としたシステムを自然保護区並に大事に管理して参りました。リニューアルに踏み切るまでには長い年月を要しましたが、ホームページにアクセスして頂く約半数の方がスマートフォンやその他のデバイスでご覧頂いている現状に、質実剛健を貫く当協会もついに動き出しました。これまで、日印協会の近代史を支えてきた世界遺産級の古めかしいホームページにサヨナラを告げ、いざ、リニューアルに臨みました。まずは見積もり交渉。協会が抱える腕自慢の交渉人を以て、コストを抑えながらセキュリティ向上と内容の拡充が実現しました。新たなホームページは、見易さもさることながら、入会申し込み機能や、お問合せ機能など、より皆様が協会へアクセスしやすくなる仕組みを組み込みました。ちなみに、「日印協会のアルバム」の下に日本とインドの標準時刻が表示されていますが、これは西本事務局長の案で、協会界隈では好評です。

協会のホームページやFacebookを、陰で支えて下さっている関係の皆様が強力な後ろ盾を得て、ホームページ運営は順調です。皆様も、何かお気づきの点がございましたら、協会へご一報下さいますと幸いです。今後とも、末永く愛されるホームページとなるよう、内容の充実に努めて参ります。 (玉岡 善美)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。



入会随時受付中



日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会のアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費: 個人	1口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
学生	1口(4,000円)から		学生 1,000円
一般法人会員	1口(100,000円)から		法人 5,000円
特別法人会員	1口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)



月刊インド Vol.114 No.10(2017年12月15日発行) 発行者 平林博 編集者 西本 達生
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <https://www.japan-india.com/>